病院のお仕事いろいろ

その1 小さな命のメッセージを全力で読み取りケアする

新生児集中ケア(NICU)認定看護師　河野美咲(かわの みさき) 副看護師長

早産や病気を持って生まれてきた新生児を集中ケアする役目です。羊水の中に浮かんで外界から守られていた胎児が、母体の外に出るというのは想像を絶する難行苦行といえるようです。

10年近くにわたって小さな子どもたちを見守ってきた河野さんは、「呼吸ひとつをするのも新生児には人生初の一大事ですし、重力に抗してからだを動かし、ばい菌だらけの外界で生きていくのは、とても過酷で並大抵のことではないのです」と新生児について語ってくれました。

成熟する前の途中段階で生まれてきたというのは、決してからだが小さいだけではありません。早産児の子では500gほどといった例がありますし、肌もちょっとこすったら皮がむけてしまうほどです。呼吸だけでなく体温も血流も安定しておらず、とてもデリケートなのです。しかし、命としての輝き、強さには、立派な一人前の人としての存在感があります。

どんなに厳しい環境であっても、それに適応しようとする姿はなんともけなげで、感動を与えてくれます。泣き声もままならない小さな命、新生児。その「新生児が全身で発するサインを、全力で正確に読み取るのが仕事です」と河野さん。

ただし、何もかもすべてサポートするのではなく、過剰にならないように、その子ならではの手助けの方法を見極めての看護も大事で、すぐに抱くことのできないお母さんとのつながりも考慮した看護を心がけているのだそうです。

か弱そうに見えた新生児も、集中ケアすることによって驚くほどの成長を見せてくれるそうで、その生命力の強さに惹かれて、新生児集中ケアの分野を希望したそうです。

その2 最先端分野の最先頭を走っている気概と自負で現場に臨む

診療放射線技師　池口雅紹(いけぐち まさあき) 技師

医療の現場で「放射線といえばレントゲン撮影」だったのはもう随分以前のことで、最近ではCTスキャン、マンモグラフィーなど、画像診断や放射線治療を行う分野や場面が増えてきました。また、MRI(核磁気共鳴画像診断装置)をはじめ、超音波検査、眼底撮影など放射線を使わない撮影もあります。

そうした高度化、細分化、専門化する診療放射線、画像診断、画像処理といった医療分野の現場で医師をサポートするのが診療放射線技師です。

「ドクターに言われた通りではなく、時には提案をすることが出来る現場の醍醐味があります」と池口技師。

この分野ではまず検査のために撮影した画像を、医師が問題個所や問題点を見つけやすいように画像処理や解析することが重要なポイントで、専門性、プロの力量が試されます。

徳島大学を経て病院勤務7年、ちょうど現場がわかり、仕事が面白くて仕方がないといった時期で、好奇心いっぱいの目を輝かせる笑顔が個性的で頼もしい、31歳の元気なアニキ的存在です。

もちろん、急ピッチで進む最先端の分野ですから、日々の研鑽も欠かせません。専門誌の論文をチェックし、新しい取り組み、進取の技術についての勉強することも心がけているのだそう。

また、がん患者さんの患部にどれくらいの放射線量を何回、どれだけの期間あてるかといった治療計画を立てるのも専門的な知識を持った診療放射線技師の仕事です。

昨年の東日本大震災、とくに原発事故以降、放射線を心配する傾向が強く、そうした社会的な変化や背景への対応にも気を配っています。

池口技師は、「低線量でいかにきれいな画像を撮るかが腕の見せどころ」と、さらに患者さんと直接、接する場面が多いので、わかりやすい説明、親切な応対など接遇にも気をつけているようです。